



佑 啓

社会福祉法人 佑 啓 会 ふる里学舎

〒290-0265 市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

発行者 里 見 吉 英

編集者 三 股 金 利

雑 感

三 股 金 利

西の方、雪を頂いた富士が裾野まで見える。昨夜の風雨が太気を浄化したようだ。夏が居座ったあと季節はどこにいったのか。仕事に追われていたせいなのか。それとも無感動なチューネンになったからか。よくわからない。

すでに冬の入口である。爽やかな空気とは裏腹に頭に残った酒で揺れている。ゆうあいピックソフトボールの選手の慰労会に飲み過ぎた。彼等もよく食べ良く飲んだ。施設長から渡されたメダルを胸に握手を求めている。その手の力が「俺も頑張ったよ」と主張していた。残念会になってしまったのだが、そういえば二次会はドイツに研修派遣の職員の壮行会。介護保険の二本とした国である。ビールはうまいしフリータイムもある。主任の「施設はな〜んも心配いらないから」との挨拶で幕を閉じるはずが再び幕開けになり、真夜中の嵐も気付かぬほどの勢いとなっておぼろ。

二十六日、成田市大谷津球場のベンチ、離発着の飛行機を視界に入れたがらの応援である。今大会からは一部二部にわかれ、一部はオフィシャルのルールで開催されることになった。勝負は

単に投げる、打つの戦いだけでなく、ルール変更への準備によっても左右された。どのチームに対しても同じ条件なのだが、チームカラーによって有利・不利が生ずるのも確かである。福祉の構造改革に似たりというところ。しかし、書きたいのは構造改革ではない。各々の選手の夢中と精一杯である。真剣な眼差し、一瞬の笑み、バッターボックスに駆け込む動作、緊張をあらわすバットの動き、監督の指示にうなづく顔、声援、動揺、そして挨拶。ルールの変更も、上手も下手も無関係、懸命な姿がグラウンド一杯にひろがっている。青空の下、久々に気分もすがすがしく第一試合は余裕の勝利。けれども第二試合は負けてしまいちよつとガツクリ。みんな良く頑張った。ちよつと悔しさの残るさわやかさ。

不透明な福祉の現状にあつて一服の清涼剤である。このソフトボールを通して見る彼らの表情や動きがじつに生き生きとしている。屁理屈をこねて満足している事が多いこの世界に一石を投げられたような気がして反省。手元に施設長が観察してきた施設の紹介冊子がある。その中

に夢を語り、理想を描き、方法論を披露する創始者の紹介が載せられている。読むうちに引かれていく。そこには夢の実現をめざす力強さと理念が具現化された利用者の堂々と生きる姿があるだけ。自信を失いかけて評価を気に掛ける状況とは大違いである。

評価の基準は一定水準に上げるためのもの、決して目的ではないはず。見失えばクロソウのような施設があちこちにできるかもしれない。創始者の夢や理念がにじみ出ていなければ魅力は無い。言い換えればその実現を求めて民間施設が始まっているのだから、それこそが評価されるべき対象ではないだろうか。

このパンフレットは私にエラソーなことを書かせるほど魅力たっぷりだ。いままぐ荷物をもとめて「皆さんお世話になりました」との衝動にかられる。でも「な〜んも心配ないですから」と主任は答えるだろう。ここは我慢のうえ今宵は夢を肴に酒を酌むか。

十月二十八日
(指導課長)

姉 と 私

井村 緑

姉は三人姉妹の真ん中で、二歳下の私とは中学まで同じ公立の学校(姉は特殊学級)へ通いました。小学校へ入学した頃の姉は、小柄で細く色白で、二つ下の私と体重、背丈が同じ位でした。毎年行っていた箱根の保養所で、体重を比べ合ったのを鮮明に覚えています。

小学校の頃の姉は、とても活発で、好奇心も旺盛でした。何度か教室を抜け出して、私に通っていた幼稚園まで、様子を見にやって来たこともありました。

バスの終点まで乗って保護されたことや、日が暮れて、家と逆方向に歩いている所を見つけられたこと等を親から聞きました。

また、姉は自分自身のこと

を「私」とは言わず、よく「僕」と言っていました。自分も男の子になりたいという願望の表れであったのかと思います。

姉をかわいがって下さったT先生の背広を着て、唇を斜めに閉じた得意そうな表情がお茶目に見えて、何となくかわい印象を振りまいていたようです。

現在の、おとなしい性格へと変わったのは、小学校を卒業する頃だった様に思えます。体型も太り目になって、母は姉の洋服選びに困っていた様です。たまにかわいいのが目に付いてもヒップが合わなかったりで見送ることが多く、結局、デザインよりも身幅優先となるのでした。(現在は学舎のご指導で、多少締まって参りました)

年齢とともに、体形や性格も変化してきましたが、幼い頃からずっと変わらないおかつ頭の姉を見てみると、ふと将来の不安が頭をよぎりま

す。

一方、私の方は、日々の生活の中で二児の世話のために時間に追われて、余裕もなく二歳上の姉の年を追いついて、随分と老け込んでしまった様にも思える今日この頃です。

今後、世の中がどう変わるかわかりませんが、ひたすら姉の幸せを願ってやみません。

(竹本 理恵子・妹)



遠山
賈子